【研修報告】
第二回社会科部会歴史分科会
高大連携の試み

歴史分科会主催のこの試みは、本年度で二回目である。この事業は二〇〇三年から毎年夏季休業中に、計四回行われた大阪大学での「全国高等学校歴史教育研究会」のあとを受け、昨年より神奈川の歴史分科会が企画・運営した事業である。

今年度は八月四日（月）～七日（木）の四日間にわたり、メインテーマ「近代アジア世界をどう教えるか」に基づき、昨年に続き栄光学園中・高等学校を会場として開催された。午前は大ホールで生徒への講義、午後は場所を図書館に移して参観教員とのシンポジウムという二部構成で行われた。今年度はとくに他府県の高校教員（関東だけでなく関西圏から、山口や広島、さらに熊本からの参加者も）が多数参加し、さらに東大大学院ゼミグループや歴史教育関係者の参加などもあり、この研修が全国から注目されていることを示した。

前半二日間のサブテーマは「グローバルヒストリーとアジアの中の日本」である。ここでは小林克則氏（前厚木商業）、早川英昭氏（栄光学園）、大阪大学の桃木至朗・秋田茂両教授と同大学院生を講師に迎えた。

グローバルヒストリーという研究方法は大まかに言えば「国民国家」の領域を越えて結びつく「地球社会」にも歴史研究の光を当てる新しい研究視野であるという理解でよいだろうか。ユーラシア大陸や南北アメリカなどの大陸規模、あるいは東アジア・海域アジアなど広域の地域を考察の単位とする研究の視点である。対象としては、近世のアジアの諸帝国とヨーロッパの海洋帝国支配、アジア商人のネットワークや移民・労働力移動、新大陸への進出による植生・生態系・環境の変容などの生態学・環境史、近現代の国際政治経済秩序などで、このようなチャレンジをグローバルヒストリーと呼ぼう、という提唱である（「ワールドヒストリー」という呼び方もある）。

グローバルヒストリーは従来の一国史的な歴史研究の枠組みを相対化し、国民国家・国民経済に代わる広域の地域や世界システム・国際秩序などの新たな分析の枠組みを模索する。世界システム論を「関係性」をキーとして読み解き、お茶・砂糖・煙草などのモノにも着目し、同時代の世界諸地域での出来事を相互につなぎ合わせて関係づけ、一体化していく世界のなかでの諸地域の位置と役割を再考し、一見すると何の関係もないと思われる歴史事象や諸地域を、全体の構造のなかに位置づけ直していく作業である。

大学受験レベルでもこの方法論を無視できなくなってきた。大学入試センター試験を突破できても、それぞれの大学が課す二次試験に対しては従前のタテの時間軸を追ってゆく学習ではとうてい対応できなくなりつつあるのが実際である。

第一日目の八月四日は、午前の部のはじめに「この分野における大学入試の傾向」（小林）、そのあと「日中双方から見た政治・外交史」（阪大大学院の大坪慶之氏・後藤敦史氏の二名によるコラボ授業）が行われた。参加者は生徒二七名、教員五七（他府県二四）名、大学・出版関係者一四名であった。生徒の所属校は、栄光学園一五名、横浜国際五名、平沼二名、追浜二名、横浜市立東二名、百合丘一名。

小林氏の講義は本研究報告三五号、三六号に掲載された「世界史における旧説と誤解」の生徒向けヴァージョン。よく勉強している生徒ほど驚く内容であった。教員もずっとそう思ってきた歴史のなかの「あたりまえ」が実はそうではないということを再認識することができたが、反面我々教員にとっても、それに気づくほど教科書をしっかり読み込んできたかを問うものでもあった。

次いで登場した二名の院生の講義は、領土問題、歴史問題、マスコミを「入口」として、「現在の東アジア」の成立を考えさせる内容で、阪大二次試験（二〇〇八年前期）の解説から読み解く日中の歴史の検討をおこなった。「清」から見た「国際秩序」と「近代」、東アジア世界における日本の「鎖国」の実態と「開国」に至る幕末外交の混乱、そして両国がもたらした「近代東アジア」を地図・画像を駆使して提示した。

生徒は往々にして重要項目をいかに暗記し増やしてゆくことに終始することが多いが、現在の入試傾向は「通説」の先を行く歴史研究の成果に基づくものがかなりあることに気付かされる。その意味では二つの講義は、歴史教育（小林氏）と歴史研究（大坪・後藤氏）の最前線にいる講師によるもので、受講生徒にとっては具体的な出題傾向とその理由、学習の盲点や方法論など「すぐ役立つ」内容であったと思われる。

とりわけ二人の大学院生は世代的にも受験生に近く、また題材にＴＶ番組を取り上げる（薩摩と幕府をつなぐ篤姫も登場）など共感をもって授業を受けたようで、生徒の受講後アンケート記述にはっきりとあらわれた。「いま」とリンクした授業を生徒は求めていたと言えるだろう。このような大学院生による授業は次回も企画したいところである。

午後の研修会では、三名の講義者をパネラーとして講義内容の補足と質疑応答が行われ、予定時間いっぱいまで討議がなされた。内容すべてを記すには紙面が足りないが、対オランダに偏りがちな江戸期の対外関係に日中貿易という視点を軸に、明治期からの日本の政治と経済を世界史とリンクさせてアジア全体の歴史を評価するというように進んだ。とくに「朝貢」や「鎖国」といった日本史における通説的理解を根本的に見直すような議論が深められたことを伝えておく。歴史教育において日本を含む世界近代史を授業の中に取り込むという重要なテーマを先取りしたものと言えよう。

八月五日はまず「アジアの中の日朝関係」（早川）、続いて「グローバル経済の中の東アジア」（秋田・桃木のリレー形式）という学会をリードする両教授のとても豪華な授業が実現した。生徒二九名、教員六〇（他府県二五）名、大学・出版関係一一名が参加した。

生徒の所属校は、栄光学園二一名、横浜国際三名、戸塚・品川女学院・横浜市立東・追浜・鎌倉学園各一名。

早川氏は、教科書における朝鮮史と日朝関係の記述を「語句」を逐一リストアップし、自ら作成した詳細な年表に基づいて近代朝鮮の混乱や日本の植民地化の実態、半島の現状までを扱い、過去の入試においてどのような出題傾向があるのかを具体的に分析した。受験生にとってはこれからの学習の際の資料となるようなプリントが提示され、講師自身の実体験を踏まえた授業となった。

桃木・秋田両教授の講義は今回のいわばメインイベントともいうべきもの。秋田氏は阪大の二次試験を題材に、近代日本とインドとのかかわり、およびそのバックにあるイギリスのグローバルな経済

体制を講義し、スターリング経済が「排除」ではなかったことについて詳細な資料をもとに解説された。桃木氏には途中何度も、そして講義後にも多岐にわたるコメントを頂き、とくに「大学に入るまでに身につけておいてほしい知識」、そして「大学側の求める学生像」など、「受験のその先」を熱く述べたのが印象的であった。

午後の討議は両教授の詳細なコメントからはじまり、（秋田氏は教員用プリントを別途用意した）質問・回答・補足説明が相次ぎ、予定時間を延長して討議が展開された。議論は「アジアの勤勉論」、「華僑の役割」、「イスラーム＝ネットワークの重要性」、「ラテン＝アメリカとアジアの違い」、「インド商人と財閥」、「綿をめぐるインドと大阪のつながり」、「日英同盟とその後」などきわめて多岐にわたるもので、最新の研究傾向を示していただき、参加教員からの質疑と両教授からの応答は討議時間の予定時刻をはるかにオーバーしても終わらず、懇親会に席を移して続いたほどである。

後半二日間は「近代化とアジア・アフリカ」のサブテーマに沿って世界史研究推進委員会メンバーが午前中に生徒に講義、午後にシンポジウムを行った。これは一昨年まで夏季休業最終週に世界史受験者対象の公開講義の継続である。夏季休業最終週が各校により異なるため、昨年からこの時期に日程を移した。ここからは栄光学園の図書室で「机を並べた授業」のスタイルで行われた。

八月六日の授業は「オスマン帝国と近代の出会い」（智野豊彦横浜市立東）、「西アジアにおける帝国主義」（杉山登　逗子開成）。生徒一一名、教員・大学関係者三一（県外一〇）名が参加した。

近代イスラームに詳しい智野氏は、この時代の入試問題が次第に増えてきたこと、オスマン帝国末期の「攻守交替」という対西欧関係史をおさえること、しかし西欧から見た歴史上の位置づけでは足りない新傾向問題や不適切な出題の存在を示しつつ、オスマン帝国の近代化への対応の概観を講義された。特に教科書記述が増えているワッハーブ運動あるいは原理主義等を簡潔に整理し、近現代が苦手な受験生のニーズに応えた内容であったといえる。

午後の討議ではことばの定義が話題になった。「オスマン＝トルコ」という表記は正しくないこと、オスマン帝国がローマ帝国の継承者を自認していたこと、「新航路開拓」イコール「オスマン衰退」ではない等々の新しい見方が提示されたが、すでに入試問題ではこのような出題が出てきているという。研修参加者のオスマン史専攻院生による言語解説がされるなど、現在の研究状況を踏まえた議論が展開され極めて有意義なものとなった。

杉山氏の講義はエジプト・イラン史学習である。このような場では（対象生徒が違う）講義者は各自が日常おこなっているものとは違う特別講義をするが、杉山氏は発問と確認をまじえ、いわゆる進学校での授業をそのまま行った。日常的な「基本事項」の確認と、より詳しい知識の「積み上げ」というべき作業のようすが披露された。意図するところは、勉強というのは授業であたらしい知識を得ることも大事だが、真に重要なことは授業後に生徒が自分で勉強するための意識づけであるということ。「馬を水飲み場へ連れてゆくことはできるが、水を飲ませることはできない」ということばが頭に浮かぶ。すなわち学習意欲を引き出すことが授業で最も大切であるということを再認識させられた。

最終日の八月七日は生徒一〇名、教員・大学関係者二九（県外六）名が参加し、「パレスチナ問題」（澤野理　川崎工業）、「アフリカに

おける帝国主義の進出」(石橋功　藤沢総合)が本講座の殿となった。

澤野氏の講義はパワーポイントによる効果的な学習をめざした授業で、現代史に関わる部分、特に領域を示す地図が好評であった。

まず「ユダヤ」「パレスチナ」問題の基本事項をプリントで押さえ、二つの世界大戦における中東の政治状況を現在の中東情勢につなげるオーソドックスな構成である。それを年代ごとに地図を提示することでより確実な知識定着をめざすもの。だがそれだけではなく「問題提起」をつけ加え、紛争の当事者の発言や現地の人々の声を挿み、「シオニズム」とは何かを考えさせたことが異なる点であった。大学入試にもよく出題されている中東の混迷した歴史を深く掘り下げ、イスラエルという「国民国家」の本質的排他性とアラブ諸国の動向を理解させようとしたものであった。

午後の討議では、パレスチナ問題と石油、ユダヤロビー、イギリス外交、帝国主義の歴史的な意味、さらにシオニズム関連の質問が多く出された。

石橋氏はヨーロッパがアフリカ進出で求めた「モノ」としてヤシの実、ピーナッツを題材として選び授業構成の柱とした。「世界商品」をめぐって列強が争い、アジアからアフリカへ争点が拡大してゆく経緯をおさえたのち、ナショナリズムに触発されたアフリカ独立へすすむが、高校生のアフリカ学習のスタートは「アフリカはどこにあるか、どんな国があるのか」。プリントの地図に国名を記入させ、それから植民地化とそれ以前の歴史を学ぶという手順で、地理と歴史をあわせたものになった。

これもまた欧米による植民地化と帝国主義をどう見るか、授業者の近代史に対する歴史観が必要な内容であり、これをどのようにして生徒に理解させるかというのが課題である。「植民地であったことは悪いことばかりでなかった」という類の言説をきちんと論破するような授業内容が求められているのである。

午後の授業検証では、まず生徒の「空間把握」が不足していること、その原因としての中学校の地理学習の問題点、さらに地図をどのように用いるかという教授法的な論議がなされ、続いて「国民」や「民族」そして「国民国家」に関する討議に移ったが、近代以後の欧米の歴史学が創作した「国民国家」というフィクションを、あたかもはるか昔からあったとするような歴史教育への危惧（途上国や日韓中もこのような歴史教育をおこなっている真っ最中である）が参加者の多くの一致した感想であった。グローバルヒストリーの必要性と同時に、これからどのように近代史を教えてゆくかが重い課題であるとあらためて認識した。

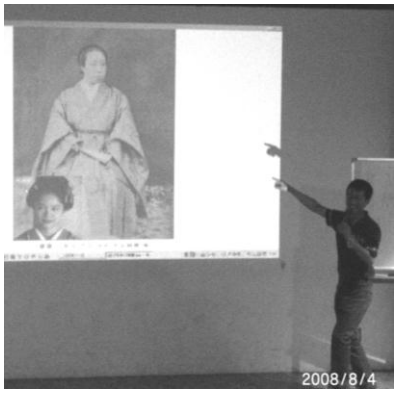
なお、二日目（八月五日）の研修会終了後、同窓会会館に両教授と院生を迎え懇親会が行われた。その席上桃木・秋田両教授がその創設メンバーである「アジア世界史学会」（ＡＡＷＨ）が二〇〇九年五月に設立されることが報告された。これを受け、次年度は二〇〇九年八月にＡＡＷＨメンバーと神奈川教員によるコラボ授業的な事業を開く計画が検討されていることを報告しておきたい。

さらに第三日目（八月七日）の午後の研修会終了後には、栄光学園周辺の史跡巡検が行われた。近くの清泉女学院は名城と評された玉縄城趾に建てられ、校舎内には城の模型がある。校舎内見学後は城跡部分を踏査し、次いで大戦中の「捕虜収容所跡」と亡くなった捕虜を祀った龍寶寺の見学が行われたことも付け加えておく。

（文責　横須賀大津高校　佐藤雅信）

第２回　歴史分科会高大連携の試み

第１日　小林氏



第１日　大坪・後藤氏

第１日　午後　教員研修会（図書室）

第２日　早川氏

第２日　桃木教授

秋田教授

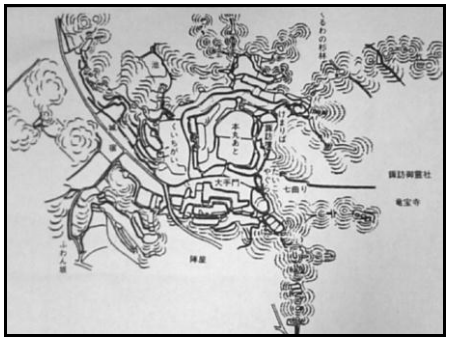
第２日　午後　教員研修会

第３日の授業者　智野・杉山氏

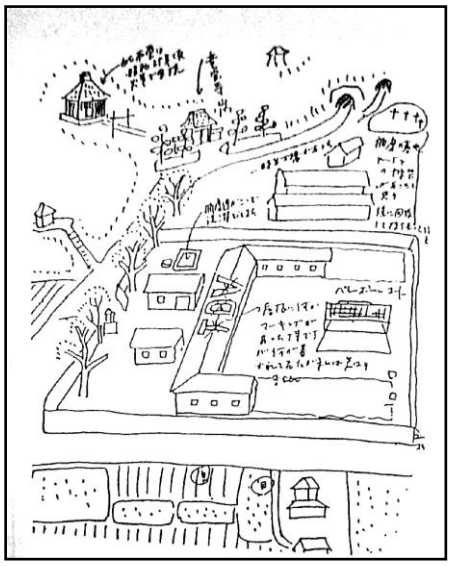
第４日　澤野氏　　石橋氏

第３日午後巡検　玉縄城趾　清泉女学院は城趾にある

玉縄城（西ヶ谷恭弘『戦国の城』関東編　学研　より）　清泉女学院案内板と城趾模型



大船捕虜収容所の向かい側の龍寶寺　　新井白石、室鳩巣、源実朝の名が見える



大船捕虜収容所全景（イラスト小坂善和氏）

龍寶寺の岩屋には病没者の慰霊のための卒塔婆が立てられていた